真実の剣、正直の刃

サー・アーサー・コナン・ドイル
SIR ARTHUR CONAN DOYLE

アーサー・イグナチウス・コナン・ドイルは1859年5月22日にエディンバラに生まれた。母親のメアリ・フォーリーはアイルランド系で、その祖先をさかのぼるとノーサンバーランドの有力なパーシー家にたどり着き、そこからはプランタジネットの家系につながるという。メアリは幼いアーサーに対して、歴史物語や雄壮な冒険譚、英雄的行為に満ちた話を語り聞かせ、これがのちに作家を職業とするにあたり、インスピレーションの種となった。一家は大家族であったため（アーサーは10人きょうだいの長男）母親にとって暮らしは厳しく、野心のない夫によるわずかな収入で家族を養うのは大変だった。チャールズ・アルタモント・ドイルというこの夫は公務員で、たまに芸術もたしなんだが、癲癇もちであるうえに憂鬱やアルコール依存の発作も起こしがちで、施設に収容されたあと、1893年に亡くなった。

教育と影響

気が滅入るような家庭環境からアーサーを逃れさせるべく、母親は金をかき集めると、彼をストーニーハースト・カレッジへとやった。ランカシャーにある厳格なイエズス会の全寮制学校である。アーサーはこの学校にいたときに宗教的信仰に疑問を抱くようになり、1875年に学校を卒業する頃には、キリスト教を完全に拒んでいた。代わりに彼は人生をかけて、信じられる別のものを探しはじめる――これが結局は心霊主義へと至るのだった。彼はこのストーニーハースト在学中に、モリアーティという同級生に出会っている――のちの執筆活動で、最大限に利用する名前だ。コナン・ドイルは、見聞きした情報やアイデア、考え方に関する些細なことや細かい点をつねに気にかけて、将来使うことになると思いながら、心にとどめていった。

> 神の最高の贈物である、
> 本を愛する心を……
> **アーサー・コナン・ドイル**
> 『シャーロック・ホームズの読書談義』（1907年）

執筆中のコナン・ドイル。ビグネル・ウッド（ハンプシャー州ニュー・フォレストに一家が所有していた田舎の静養所）の庭で1920年代後半に撮影されたもの。

オーストリアのフェルトキルヒにあるイエズス会の学校でさらに1年学んだのち、コナン・ドイルはエディンバラ大学で医学を学ぶ道を選び、芸術を好む家族を驚かせた。同大学で学んだこの期間（1876年から1881年まで）に、彼はのちの登場人物のモデルとなる二人の教授と出会った。自伝『わが思い出と冒険』（1924年）ではラザフォード教授について、「顎と頬に広がるアッシリア風のひげに、並外れた声、厚い胸板と風変わりな態度」と記している。のちに手がけた有名なSF小説『失われた世界』（1912年）の主人公で、ジョージ・エドワード・チャレンジャー教授に用いることになる特徴だ。さらに重要となるのが、ジョゼフ・ベル博士との出会いである。患者の経歴や状況を推理するその手法たるや、ほとんど魔法のように思えた。このベル博士がシャーロック・ホームズのモデルとなり、インスピレーションを与えてくれたことは、ホームズ物語の最初の短編集である『シャーロック・ホームズの冒険』（1892年）が「わが懐かしの師ジョゼフ・ベル」に捧げられていることからもわかるだろう。

1891年創刊の《ストランド》は、短編小説を掲載するイラスト入りの月刊誌だった。ホームズものはこの雑誌に掲載されて大いに人気を博した。

コナン・ドイルの父親は家に不在がちだったため、ベルのことを父親代わりに見ていたとも言われている。

学費の支払いと家族を養う母親を助けるため、コナン・ドイルはアルバイトをいくつも行い、医療助手としてバーミンガムやシェフィールド、シュロップシャーに赴いた。さらには、北極圏に行く捕鯨船の船医を務めたこともあり、この体験はのちに執筆する幽霊話「北極星号の船長」（1890年）や〈ブラック・ピーター〉（184～185ページ）の題材となっている。

医師から作家へ

卒業後の1882年、コナン・ドイルはデヴォン州プリマスでジョージ・ターナヴィン・バッド医師と組んで医院を始めた。バッドはエディンバラ大学の学友だったが、常軌を逸していて激しやすいところがあったため、この協力関係もじきに消滅してしまい、コナン・ドイルは荷物をまとめてハンプシャー州サウスシーでみ

作品情報

タイプ
長編小説

英国での初出
《リピンコッツ》1890年2月号

単行本の出版
『四つの署名』スペンサー・ブラケット社、1890年10月

主な登場人物

メアリ・モースタン　若い家庭教師。

モースタン大尉　メアリの父。

サディアス・ショルトー　イングランド人紳士。

バーソロミュー・ショルトー
サディアスの双子の兄。

マクマード　ポンディシェリ荘のガードマン、門番。

ラル・ラオ　ポンディシェリ荘のインド人執事。

バーンストン夫人　ポンディシェリ荘の家政婦。

ショルトー少佐　サディアスとバーソロミューの父。

ジョナサン・スモール　英国人。

マホメット・シン、アブドゥラー・カーン、ドスト・アクバル　ジョナサン・スモールの仲間。

トンガ　アンダマン諸島の現地人。

アセルニー・ジョーンズ　スコットランド・ヤードの刑事。

モーディケアイ・スミス　蒸気艇オーロラ号の持ち主。

セシル・フォレスター夫人　メアリ・モースタンの雇い主。

第1章
ワトスン、ホームズの薬物摂取を非難する。ホームズはワトスンの時計の来歴を分析してみせる。

第3章
メアリ、父の書類の中から「四人のしるし」などと書き込まれた建物の見取図を見つけ、ホームズに見せる。

第5章
ホームズ、ワトスン、サディアスの3人、バーソロミューが毒矢で殺され、財宝がなくなっていることを発見。

第7章
殺人犯はクレオソートの中にうっかり足をつっこんでいた。ホームズとワトスン、犬のトービーに臭跡を追わせる。

第9章
ホームズ、船員に変装して船の居場所をつきとめ、警察の蒸気艇を出動させるよう、アセルニー・ジョーンズ刑事を説得。

第11章
ワトスン、取り戻した財宝の箱をメアリに届ける。しかし、箱は空っぽ。財宝はスモールがテムズ川に捨ててしまっていた。メアリとワトスンは互いの思いを打ち明け合う。

第2章
メアリ・モースタン、父親の消息不明と、匿名で真珠を送ってきていた相手が会いたがっているという二重の謎をかかえて、ホームズに助力を求める。

第4章
真珠の送り主サディアス・ショルトー、メアリの父が死んだいきさつと、自分の亡き父が手に入れた「アグラの財宝」を兄のバーソロミューが見つけたことを打ち明ける。

第6章
ホームズ、殺人犯は子どものような体格であり、一緒にいた片足の男は、「四人組」のうちのひとり、ショナサン・スモールだろうと推測する。

第8章
トービー、ホームズとワトスンを舟着き場へ連れていく。スモールはオーロラ号という蒸気艇を雇って雲隠れしていた。

第10章
日没とともにオーロラ号が隠れがから出てくる。ホームズ、ワトスン、ジョーンズ、警察艇で追いかけ、連れの小男を銃で倒してスモールを逮捕する。

第12章
スモール、アグラの財宝にまつわる話と、ショルトー少佐が「四人組」からその財宝を盗んだ経緯を語る。ワトスンとメアリ、婚約する。

1888年、打ち込める仕事のないホームズはコカインに救いを求め、ワトスンに叱咤される。だが、依頼人メアリ・モースタンの訪問とともに、やっと解決すべき謎がもたらされた。メアリの父モースタン大尉はインド駐留の軍隊にいたが、ロンドンに一時帰国した10年前に消息を絶った。当時メアリは父の友人ショルトー少佐に連絡してみたが、帰国していたことも知らないと言われた。その4年後から、彼女のもとに毎年ひと粒の真珠が届くようになり、今度は謎の送り主が会いたいと言ってきているのだ。メアリは、父の財布の中から見つけた紙をホームズに見せる。四つの十字を横につなげたような絵文字と、「四人のしるし――ジョナサン・スモール、マホメット・シン、アブドゥラー・カーン、ドスト・アクバル」という言葉が書かれていた。

その晩、ホームズとワトスンはメアリに付き添って真珠の送り主に会う。それはショルトー少佐の息子、サディアスだった。少佐は死の床で、モースタン大尉が失踪当夜に訪ねてきたのだが、口論の最中に事故死してしまったので死体を処分した、と告白したのだという。少佐と大尉は箱いっぱいの「アグラの財宝」を手に入れていたが、双子の息子サディアスとバーソロミューに財宝の隠し場所を明かす前に、少佐は息絶えてしまう。このときからサディアスが匿名の贈りものを届けはじめたのだった。

サディアスはバーソロミューが実家で財宝の箱を見つけたとホームズたちに教える。しかし一行が到着してみると、バーソロミューは毒矢で殺され、財宝はなくなっていた。ホームズは、現場にいた義足の男はスモールであり、その連れが殺人犯だと推理する。スコットランド・ヤードのアセルニー・ジョーンズ刑事がサディアスを逮捕する一方、ホームズはスモールがオーロラ号という蒸気艇を雇って潜伏していることをつきとめる。

その夜、オーロラ号が隠れがを出てテムズ河を下りはじめると、ホームズたちの蒸気艇が追跡を始める。「野蛮人」が吹き矢で攻撃してくるが、応戦した銃弾に倒れて船から落ちる。ついにスモールに追いついたものの、財宝はテムズ川に沈められていた。スモールの話では、1857年のインド大暴動の頃、スモール、シン、カーン、アクバルの4人は人を殺して手に入れた財宝をアグラの砦に隠したが、逮捕され、流刑となってアンダマン諸島へ移された。その後、現地軍にいたショルトー少佐とモースタン大尉に、財宝の分け前の代わりに自由の身にしてもらったのだが、ショルトーは財宝を持ち逃げしてしまう。スモールは復讐を誓い、現地人（例の「野蛮人」）を仲間にして島を脱走し、ショルトーを捜し出したのだった。

物語は、ワトスンがメアリとの婚約をホームズに知らせる明るいシーンで幕を下ろす。■

この事件はぼくとしても絶対に手放したくありませんよ

〈赤毛組合〉(1891)
THE RED-HEADED LEAGUE

作品情報

タイプ
短編小説

英国での初出
《ストランド》1891年8月号

収録単行本
『シャーロック・ホームズの冒険』1892年

主な登場人物

ジェイベズ・ウィルスン　質屋。

ヴィンセント・スポールディング
ウィルスンの質屋の店員。

ダンカン・ロス　赤毛組合の事務所の管理人。

ピーター・ジョーンズ　スコットランド・ヤードの刑事。

メリウェザー　シティ・アンド・サバーバン銀行の重役。

〈赤毛組合〉は〈花婿の正体〉(68～69ページ)のあとに書かれた作品だが、《ストランド》には先に掲載された。こちらのほうが出来がいいと思った編集者が、ホームズ人気をできるだけ早めに定着させたいと考えたからではないかと推測する、ホームズ研究者もいる。確かに、コナン・ドイルもこれを気に入っていた。だが、もうひとつ、もっと本当らしい理由がある。この作品の執筆には7日間しかかからなかったし、これを含む最初の短編3作は1891年4月中に書き上げられた。《ストランド》に〈赤毛組合〉と〈花婿の正体〉が一緒に送られた結果、掲載順序が逆になった可能性が高いというのだ。

ホームズによるジェイベズ・ウィルスンの分析

ウィルスンの**右手**は左手より**「完全にひと回りは大きい」**うえ、筋肉がよけいに**発達している**。

弧とコンパス（**フリーメイスン**の紋章）の胸飾りピンをつけている。

右手首上にある**魚の刺青**(いれずみ)は「中国だけのもの」。しかも時計鎖に**中国のコイン**をぶら下げている。

右手の袖口がてかてか**光っている**し、**左の肘**の、ちょうど机にあたる部分に**すべすべしたつぎ**があたっている。

ジェイベズ・ウィルスンは昔、肉体労働をしていた。フリーメイスンの会員であり、中国にいたことがあり、また最近かなりの量の書きものをした。

作中、ホームズが「メアリ・サザーランド嬢がもち込んだあの単純な事件」と〈花婿の正体〉の一件を話題にしているところから、手違いがあったのは明らかだろう。

これは、人間のだまされやすさに焦点を当てた物語だ。ドイルはホームズの言葉を通じて、事件の奇妙で信じられないような性質に注意を促している。「……奇妙な偶然の一致とか変わったできごとを求めるなら、いかなる想像の産物よりもはるかに奔放な、実生活そのもののなかを探さねばならないということだ」

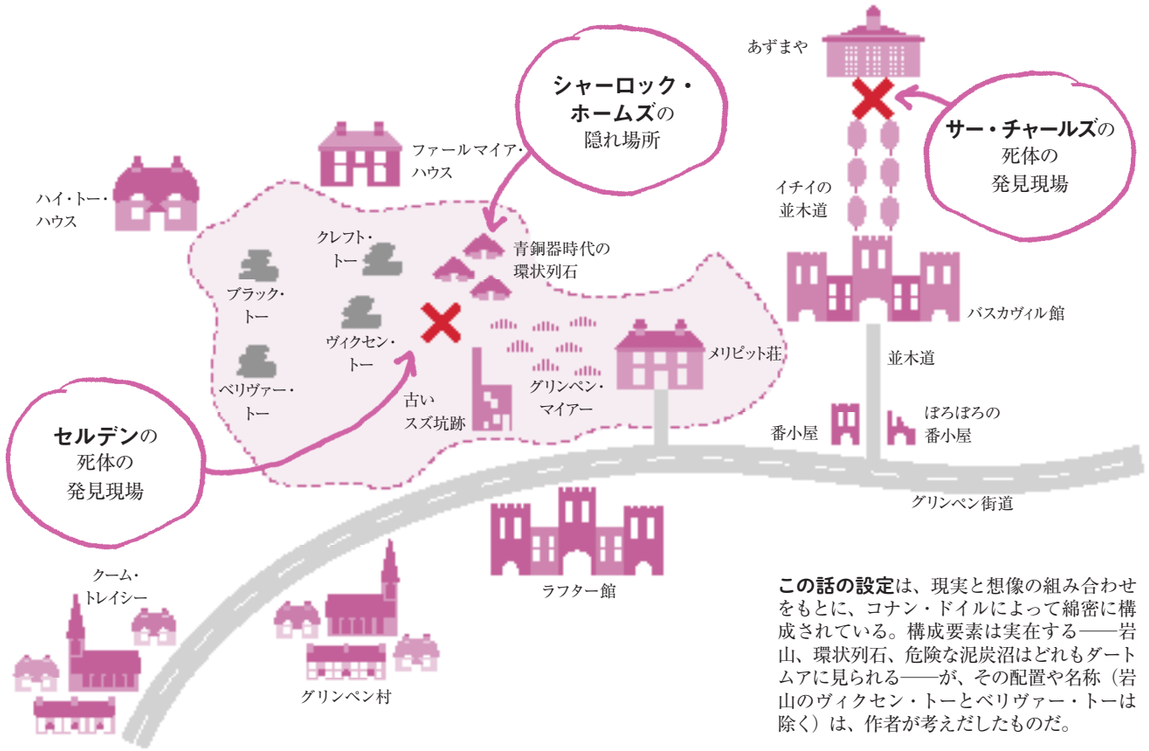
ありふれた始まり

ワトスンがある日ホームズを訪ねてみると、ホームズはがっしりとした体格で赤ら顔の、ジェイベズ・ウィルスンという質屋と熱心に話し込んでいた。ウィルスンは「どこにでもいるありふれた英国商人」だが、燃えるような赤毛のふさふさした頭髪という点だけが違っていた。ホームズは彼がフリーメイスン会員だと、すぐに気づく。ドイルもこの秘密結社の一員だったことがある。ホームズ自身、会員だったのではという説もあるが、彼が「あなたがたの団体」と言っていることから、結社への関心はないらしい。ホームズは、ウィルスンがかなりの量の書きものをしたことも見抜くが、面白味のないその仕事を軸に、とんでもないことがたくらまれていたのだった。

あまり同情はできない

質屋というのは、宝石その他の貴重品を担保に現金を借りなければならなくなった貧しい人々を相手にする、高利貸しと変わりない商売だから、今の読者からは同情されなそうだ。ウィルスン本人

ジェイベズ・ウィルスン（グラナダ・テレビ制作、1985年放映。俳優はロジャー・ハモンド）が、赤毛の人込みをかきわけて連れていかれる。



この話の設定は、現実と想像の組み合わせをもとに、コナン・ドイルによって綿密に構成されている。構成要素は実在する――岩山、環状列石、危険な泥炭沼はどれもダートムアに見られる――が、その配置や名称（岩山のヴィクセン・トーとベリヴァー・トーは除く）は、作者が考えだしたものだ。

（モーティマーの心はもとより）読者の心に深まっていく。そこにホームズが再登場し、理性が迷信に打ち勝つのだ。

ホームズ自身は物語の大部分において不在だが、これはコナン・ドイルのミスではない。ホームズの不在により、彼が能力を発揮するといういつもの興奮がない状態で、読者に期待感が生まれていく。ホームズが実は密（ひそ）かに現地にいたことを読者が知るに及び、この計略をさかのぼってみると、ますます魅力的に思えるのだ。

ワトスンにホームズほどの能力はないかもしれないが、彼はホームズの言う「行動派」であり、「いつだって元気なことをしたがる」のである。確かにダートムアでのワトスンは元気で、バリモアと正面から向き合い、地元の人に遠慮なく話を聞き、ムアに隠れている人物を待ち伏せし――これはホームズだったが――殺人犯セルデンを無謀にも追いかけている。

> **みな異口同音に、**
> **青白い光を帯びた、**
> **化け物か幽霊のような**
> **巨大な怪物だと言うのです。**
> **モーティマー医師**

語り

ダートムアにおけるワトスンの冒険談は、221Bへと送られた報告（すべてダートムアのホームズのところへ送られていた）と、詳細な日記の内容を混じえたものからなる。そのせいで、正典には珍しく、いくつかのエピソードからなるという感じが出ている。ほかのホームズもので見られるような、サスペンスとホラーのクライマックスを強調するという方式でなく、テンポを執拗に高めながら、それぞれに異なる刺激的な場面を連続させることで、話が形成されているのだ。これによって説得力ある信憑性（しんぴょう）が加わり、かなりありそうもない出来事ながら、読者の疑念をおしとどめることができているのだ。とはいえ、何よりも読者が感じるのは、ダートムアという土地と姿を見せぬ魔犬の吠え声、それに邪悪な悪漢による、不気味な雰囲気だろう。

1906年、プリンスタウンにあったダートムア刑務所の正門を通る囚人の一行と看守。ナポレオン戦争（1803～1815）の囚人を収容するために建設されたこの刑務所は、のちにはセルデンのような殺人犯も収容した。

ぴったりの舞台設定

荒涼としたムア、新石器時代の遺跡、ごつごつした岩山（ト）、曲がりくねる小道に小川、孤立した住居、霧に包まれた恐ろしい沼……コナン・ドイルがダートムアを実に鮮やかに描いたことで、それ自体が登場人物になったかのような感がある。そして、そこにそびえるように存在するのが、実在するプリンスタウンの大監獄。ホームズが述べているように、このような暗い話にはぴったりの舞台設定である。ワトスンは、ダートムアを「世界の片隅の、神にも見捨てられたようなこの地……このムアにいればいるだけ、ムアの霊がじわじわ心にしみ込んでくる」と表現している。地元の「農民」同様に、サー・チャールズは犬の伝説を信じており、どんなに言われても夜中にムアへ出て行くことはなかった。ワトスンとサー・ヘンリーの決心は揺るがなかったが、セルデンの捜索で夜間にムアに出たときは、不意に耳にした犬の吠え声に、さすがの二人も震えていた。「夜のしじまをついて風に乗って届いたその声」と、ワトスンは報告している。「低く引きずるようなくぐもった声だったのが、ひときわ高い遠吠えになり、悲しそうな嘆きになって、消えてゆく」。ワトスンはこの犬が超自然のものとは一度も信じていなかったが、サー・ヘンリーの自信はそれほど揺るぎないものではなかった。彼はワトスンにこう言っている。「ロンドンでだったら笑い話になることも、このムアの暗闇に立ってあんな鳴き声を聞いたとなると、笑いごとじゃありませんね」

バスカヴィルの家系

伯父のサー・チャールズ同様、サー・ヘンリーも読者の心を引きつける登場人物だが、これはコナン・ドイルが彼の身の安全を読者に気にかけてほしいと望んに入れ、その上に重い石を載せた。ウィシュト・ハウンドが彼を死へと追いやり、夜ごと集まっては彼の墓の周囲で吠えているという。また、首のない彼の幽霊がウィシュト・ハウンドを率いてムアを駆け回っているとも言われる。

この物語では、ステイプルトンがブラッドハウンドとマスティフの交配種をロンドンの業者――フラム通りにあるロス・アンド・マングルズ商会――から購入して、バスカヴィル家の犬をつくり出している。そして、この巨大な犬を飢えさせて、くずれかけた坑夫の小屋で鎖につないでいたのだった。

地獄の猟犬

多くの国の神話では、黒い犬を悪魔の使いと呼び習わしているが、この不吉な動物の集団はダートムアに生息していると言われている。ウィシュト・ハウンド（“ウィシュト”は“不気味な”という意味の古語）はサタンの創造物で、獲物を追って空を飛ぶことができる。これを率いるのが悪魔の“デュワー”で、17世紀の悪徳郷士である“バックファストリーのリチャード・キャベル”のことだとされることが多い。処女を誘拐した、吸血鬼だった、妻を殺害したと、キャベルはさまざまに言われている。キャベルが1677年に死ぬと、村人たちは彼を頑丈な墓

アニメーションのホームズ

ホームズが最もエキセントリックなかたちで描写されるのは、子ども向きの作品――マンガの形態だ。1946年という早い時期に、ダフィ・ダックが“The Great Piggy Bank Robbery”の中でホームズに会っている。1986年には、ディズニーがネズミの名探偵バジルのアニメを制作した（邦題『オリビアちゃんの大冒険』）。バジルは友人のドクター・デヴィッド・Q・ドーソンと一緒にベイカー街221Bの壁の向こうに住んでいる。モリアーティに相当するラティガン教授の声はヴィンセント・プライスがあてた。

1980年代には、アメリカのテレビアニメ *Scooby Doo*（邦題『スクービー・ドゥー』）にホームズのゴーストが現れたほか、“Elementary, My Dear Turtle”ではティーンエイジ・ミュータント・ニンジャ・タートルたちがホームズの助けを得て、モリアーティの世界征服の野望をくじく。1999年のテレビ・シリーズ *Sherlock Holmes in the 22nd Century* では、ホームズが生物学者の手によって復活し、モリアーティのクローンと戦う。彼を手助けするため、レストレード警部の“コンピュードロイド”がワトスンの記録を読んで名前や顔、声、癖を身につけ、ワトスンになりきるというもの。また2010年には、劇場用映画でホームズがトム＆ジェリーと会っている。

Approaches（邦題『20世紀のシャーロック・ホームズ』）として劇場公開された。制作はレンフィルムで、ホームズをワシーリー・リヴァーノフ、ワトスンをヴィターリー・ソローミンが演じたが、二人は外見の「英国人らしさ」とパジェットの挿絵に似ているところから起用された。プロットは正典に忠実だが、かなりのユーモアがちりばめられている。

確固たるホームズ像？

1980年代から90年代にかけて、英国の俳優ジェレミー・ブレットは、多くの人がこれこそホームズだと言うような存在となった。グラナダ・テレビ制作のこのシリーズは、真性ホームズを生み出すことを意図しており、コナン・ドイルがホームズに与えた属性をブレットほど数多く具体化させようとした俳優は、いないだろう。シリーズのプロデューサーであるマイケル・コックスが言うように、ブレットは「その声、知的なところ、存在感、身体つき、障害物を飛び越える能力、変装がうまいと思わせる力、馬の扱いなど、〔ホームズに〕必要なものをすべてもっていた」のである。

世界中のファンにとって、ブレットこそが真のホームズだった。その魅惑的な演技、抑制された奇抜さ、気取った話し方、そして猛烈な怒りの噴出が融合して、不朽のホームズ像をつくり出したのだと言えよう。ブレットの相手をつとめたのは、二人の対照的なワトスンだった。デヴィッド・バークが敏感ながらも時として陽気な演技をする一方、8年にわたってこの役を演じたエドワード・ハードウィックは、誠実さと我慢強さを強く感じさせ、静かな説得力をもっていた。

> 人々はホームズとワトスンに惚（ほ）れ込むのでなく、彼らの人間関係、友情に惚れるのだと思う。
> **スティーヴン・モファット**
> BBC『SHERLOCK』の脚本家

ジェレミー・ブレットは1984～1994年のグラナダ・テレビ・シリーズでホームズを演じた。彼は「これまでに演じた中で最も難しい役だった」と言っている。

21世紀のホームズ

21世紀に入っても、世界中の人たちがこのベイカー街の名探偵に魅了され続けた。2009年と2011年、英国の映画監督ガイ・リッチーにより、ホームズはコミックスの中から抜け出てきたような誇張されたアクションヒーローとして現れた。無法者っぽい味付けで演じるのは、アメリカの俳優ロバート・ダウニー・ジュニア。ホームズの欠点と悪癖が強調され、一種風刺的になっている。

ガイ・リッチーの映画『シャーロック・ホームズ』（2009年）は、1890年代のロンドンを舞台としている。ロバート・ダウニー・ジュニアのホームズがボヘミアンである一方、ジュード・ロウのワトスンは、時には怒るものの寛大だった。続編は2011年公開。

一方、テレビ界では二つの意欲的な作品が、ホームズとその世界を現代にもってくるという“再創造”を行った。ひとつは2012年にプレミア上映をしたアメリカの *Elementary*（邦題『エレメンタリー ホームズ＆ワトソン in NY』）で、薬物依存症でリハビリ中のホームズ（イギリスの俳優ジョニー・リー・ミラー）がニューヨーク市警の手助けをするというもの。彼の女性ワトスン（ルーシー・リュー）は、元外科医で、最初はホームズの再発防止の付添人だったのが、一緒に事件捜査をするうちに一種の弟子になっていく。回が進むにつれ、モリアーティやアイリーン・アドラーといった正典中の人物も加わり、予期せぬひねりの効いたストーリーが展開する。

ホームズを現代にもってくる設定のテレビ・シリーズは、英国のほうが早かった。スティーヴン・モファットとマーク・ゲイティスという、ホームズファンを標榜する二人の脚本による、BBCテレビの *Sherlock*（2010年スタート、邦題『SHERLOCK／シャーロック』）だ。ハイテク時代のロンドンで活躍するホームズは、最新テクノロジーを本来のホームズ的なやり方で駆使して事件を解決する。“推理の科学”というブログまで書いているほどだ。

この番組は世界中で大成功を収め、特に若い世代から支持を得た。テンポが早く、ユーモラスで、オリジナル正典を使った興味をそそるプロットが詰まっているからだ。しかも主役の俳優二人は、正典中でホームズとワトスンが最初に出会ったときの年齢に近い。ベネディクト・カンバーバッチのホームズは、いわば変人だが、傲慢で社会不適応であるにもかかわらず、非常に魅力的な人物だ。またマーティン・フリーマンのワトスンは、自分独自の考えと友人に対する忠誠心が混ざって、不安定になっている。“死んだ”はずのホームズが戻ってきたときに彼は思わず暴力をふるうが、正典中のワトスンのなまぬるい反応（単に気絶する）に比べたら、現実的かつ自然な行為と言えよう。

125年以上前に活字として現れて以来、シャーロック・ホームズは途切れることなくメディアに出つづけてきた。コナン・ドイルの創造した人物は、文学の枠を越えて世界的な現象となり、今でも新たなファンをつくりつづけているのである。■

BBCテレビの『SHERLOCK／シャーロック』は、ホームズたちを現代社会に連れてきた。ホームズ役はベネディクト・カンバーバッチ。マーティン・フリーマンのワトスンは、事件記録をブログで行った。